

光輪鈔

金子大栄

上 一如の実相

親鸞に於て明記せられてあるものは一如の実相であって、万有の本体というようなものではない。しかれば青を知りて青、青を見ないものは、青の実体に執えられて青、青の実相を知らないものといわねばならぬのであろう。

したがって実相を知るものは、凡知ではないようにも思われる。されどその智慧は理性とか論理とかいうものを要求するものではない。ただ *it is so* と領解を要求しているのである。

中 は現前当来の法である。 *it is so* は実相である。如である。更に分別を要としない。その通りであるから、理性を用いず論理に依らず、それが如である。

これに依りて親鸞は、この如を以て無為涅槃界としている。無為とは為作造作を用いざることである。分別思惟を要とせざることである。これに依りて極楽は無為涅槃界であると解説し、そしてその無為涅槃は即ち法性である、一如である、法身であるといっても、ついにそれが実体であるとか法体であるとかはいっていない。八正道は八聖道であり、八向涅槃道である。それは八つの道があるのではない。ただ一つの道である。

その実相を表現するものは名詞または動詞ではなく、形容詞または副詞ではないであろうか。例えば八大地獄といえば、八つ（名詞）の地獄があつて、それぞれの業因によりて（動詞）その果を受くると解せられている。所詮、実体思想である。それは『往生要集』の著者にありても変ることはない。されど親鸞においてはそうではなかったであろう。すべては形容詞である。likelyである。地獄には等活の相あり、黒繩の相あり、乃至頭下足上の相ありということではなかったか。しかれば「地獄は一定すみかぞかし」で十分である。そしてそれが往生一定とも転成されるのではないか。

同様に浄土の十楽というようなことも十種の実の相があるのではない。已に詳説せるように、極楽無為涅槃界である。しかれば入正定聚というも実体的に成立するのではない。それなればこそ往生は一定である。

『教行信証』『和讃』等に顕わされたものは名詞でないということは久しく留意されたことであつた。されどそれは動詞であるということではない。弁証法というものも、実体を予想しているものではないであろう。親鸞も名詞として用いられているものは形容詞としての実相である。

中 対応の行信

満之先生は宗教とは有限と無限との対応であると道破せられた。有限より見れば無限は有限の外にあり、無限より見れば有限は無限の内にある。これは対応ということである。しかればその対応とは、即ち相応ということであろう。

その相応とは、即ち『論註』に如来は是れ実相身なり、是れ為物身なりと知ることであると解説せられてある。これ恐らく如来は実相身でなくば為物も不可能であるということであろう。如来は実相身なるがゆえに為物身となり、為物身なるがゆえに実相身である。しかるに称名憶念すれども無明なお存して所願を満たざるは何故であるか。それ

は称名して、憶念しようとするからである。それは念仏の実相ではない。念仏それ自身が憶念するのである。だからその憶念は純一に相続する。それが若存若亡であり、純一に相続せざることは、何か実体思想に執えられているからではないか。これに依り如実修行相應は信心一つに定めたりと領解せられた。

その相應は対応である。有限より見れば無限は有限の外にあり、無限より見れば有限は無限の内にあるといわれる。それが相應としての対応である。

しかるにその相應は即ち感応であらねばならぬ。それは特に量深先生に依りて強調せられているように思われる。それは二種深信の体験ともいうべきものであろう。〃自身を信ず〃乃至〃信を超えて願に帰す〃というようなことは、すべて感応せられたものではないか。しかるにその法機の深信は一度は逆対応といわれたものであった。されど対応に順逆はない。「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」それこそ感応として直接なる対応ではないか。

聖徳太子に依れば〃もし機、感ずることあれば応きわまりなし〃と道破せられてある。しかれば対応に正逆あるのではない。ただ感応あるのみである。

こうして対応は感応であることが明らかにせられた。しかるにその感応を成立せしめるものこそ、呼応ともいうべきものではないか。本願に感応せしめるものは、その本願は招換の声であるからである。真実の教は本願を宗とし、名号を体とすといわれている。その体とは法（わづ）であり、宣（のたま）せであり招換の勅命といわれている。しかれば感応というもその勅命を感じ、それに応答するの外ないであろう。こうして如来と衆生との対応は相應感応呼応として身心に行証されていくのである。

下 光輪の道理

生死の帰依ということがある。私はそれを「死の帰するところを以て生の依るところ」と受容している。それは生の依るところを以て死の帰するところとするというも同じことかも知れない。されどそれでは何となく緊張さが損なわれるようである。といつても生死事大なりというも、死生命ありというも別のことでないに違ひはない。とすれば、
「いかに死すべきか」を主とせねばならぬところに、私の生い立ちがあり人生経験があったといつてもよいのであろう。

ここには生死の帰依を明らかにすることが私たちの道であるということである。道とは何か、知進守道である。道を行うものは日々新たに日々新たなものを感じる。即ち知進である。されどそれは脱線するものであってはならない。そこに守退ということがある。その退一步をあらしめる、その守退なくば知進は成立しない。それが道である。しかるに、その知進守退であらしめる道たるは円であり特に輪であらねばならない。若し道は限りなく前進を求め直線であれば、それはかえって道に迷い道を知らないものといわねばならぬであらう。

われらの道は円である。しかもその円は常に新たな円輪である。生死の帰依とはこの円輪に摂められていくことである。故にその円輪は光輪といわれる。生死の帰依となるものは、即ち光輪に摂められていくものである。

光輪の言葉に心ひかれて輪形を图示せるものに興味を感じ、また円輪の幾何学軌跡というものさえあるべきことを推求した。されど思想の及ぶところでなく、また必要もないことである。

ただ一つ適切に思い合わされるものは水輪である。石を水に投げ入れる。その沈んでゆく深さにしたがって波紋は

広がっていく。その深さは知ることにはできぬが、広さはその深さを表現している。そこには広さは深さの分量なるべしと言わるるものがある。

和讃を拝誦する。それは

無明の暗夜をあはれみて

法身の光輪きほもなく

無碍光仏としめしてぞ

安養界に影現する

と讃嘆せられた。これ即ち今ここに念仏の衆生を撰取するのは法身の光輪であるということであろう。しかれば光明遍照十方世界は光輪の広さであり、念仏衆生撰取不捨はその深さの測ることのできぬものなることを彰わすものではないであろうか。

われらの道は円であり輪である。生死の帰依となるものは知進守退の道である。その道は光輪の摂化であることは繰返すまでもない。ますます深入せしめられるのである。だからそこに与えられてあるものは分を尽くして用に立つということである。

その分とは孤として独生独死するというようなものではない。弧となりて全の用に立つことである。ここでは如来の光輪は即ち衆生の行信として廻向せられる。その行信こそ弥陀成仏して十劫を経たる今、十方諸有を利益し、安養界に影現して、ここに光輪の無際なることが現わされたのである。

しかれば光輪は後光として背負わされているようなものではないであろう。後光には何か実体的のものが感ぜられる。光輪はそうではなく、かえって雲の如く、遙かに照らしてほのかに感ぜられる。これに依りて私たちは、かえって有無の実体思想を離れて平等覺に帰することとなる。平等覺は即ち「如の実相」である。その身に触れるものこそ真に身に浸みて感ぜられるものではないか。